

ボーと表へ出て道の小半丁も來ますと、横町の細合ひから頭を綺麗に剃た男が。

「へエ。次さん……此處々々……」

「シツ。シツ。……オ、是れは田中屋さんの御隠居で……先達ちましては若旦那のお芽出度で……イエお恥しい。其節は又結構なお祝ひを有難ふ存じまして。どうぞチトお遊びに……」

「モシ。次さん……此處だつせ……(ボン〜)」

「シツ。シツ。チャイツ。……へエ今日は……お天氣で宜しふムります。ア、先日の見本の口は未だお返事はムりまへんか。ア、左様でへエ。何分宜しふお願い申します。御免……」

「もーし。次ーさんツ」

「阿呆。」

「エ、。」

「先刻さつきにから物を言ふなと目顔で知らしてゐるのが解らんか。お前の風態ふうたうを見んかい。縮緬ちぢみづくめに甲斐絹かひぬのパツチ。誰の眼から見ても幫間丸出しやがナ。そんな風して近所で物言われて堪るかい。チイと向ふ先を見て氣を利かしんかいナ」

「そふかて貴方。約束の時間が來るのにお入い外でや無いさかい、皆が心配して一遍様子を見て來い云ふので、私がお宅の前を何遍もウロ〜」

「それが不可んのやがナ。一遍通たら解たアるわい。俺しも出る機しほが無い依てに、店の者に一通り小言ふといて、スツと出様と思てたんや。それに其派手な風態ふうたうで往たり來たり〜。此方は氣が咎めて出るにも出られへんがな。」

「さア左様やさかい私いかで頭遣ふてまつせ。あんまり何遍も通つたら不可んと思ふたよつて、二十錢遣つて羅宇仕替屋の荷借つて……」

「それで味噌つけてるがナ。羅宇仕替屋の荷を擔げるのやつたら、羅宇仕替屋の風態ふうたうをしんか。其儘の着物で荷丈にきけ擔げて何するのや。子供ちウもんは眼が早い。番頭はんあれ見なはれ、あの羅宇仕替屋豪い佳え着物べ着てまつせ云ひよつた。俺しやヒヤツとして脇の下から汗が流れたがナ。」

「アツハツハツハツ。」

「コレ笑ひ事や無いでほんまに。それで船わい」

「サア夫れがだすねん。云はいで宜えのに辻梅の姐貴が榊家の女將おかみに今日コレコレやと喋たもんや。サア貴方、小蝶根はんが來る、吞ンハツあんが來る。毎時いもの榊家の顔觸れが皆來ましたんや。舟が云ふてた様な茶船では乗れまへんがナ。仕様が無い依て家形一艘……」

「そんな無茶すない。ワヤに仕よるな。……それで何處へ絡いだアるのや。」

「東横堀の研石屋の濱だす。」